

3. 記念講演

「広島大学を飾った人々～森戸辰男と梶原季之～」

広島大学文書館 館長 小池 聖一



ただ今、ご紹介にあずかりました広島大学文書館の小池と申します。今日は、記念講演ということでお話をさせていただきますと思います。

工業会にお招きいただき、本当にありがとうございました。私自身は、工業会も包括するかたちでできました校友会の設立の段階から関与し、企画・立案してきたということもありまして、当会の井上理事等々ともいろいろお付き合いをさせていただき中で、今日、講演をさせていただくことになりました。正直言いますので、今までとは少し違うような講演かと思っております。肩の凝らないかたちでお話をさせていただきますと思いますので、お聞きいただければと思っております。

今日は、「広島大学を飾った人々」ということで、代表的な人物として二人を選びました。一人は森戸辰男、もう一人が梶原季之です。真ん中にありますが、広島大学文書館でございます。

この二人は、実は会っているのです。会っていると言っても、広島大学長と広島高等師範学校の学生です。写真で裸の梶原が持っているのが、後でお話をしますが、『買っちゃんねえ』という本です。こういう二人は、ニアミスみたいなかたちで昭和25年（1950年）に会っております。

まず森戸からお話をしていきたいと思っております。森戸は、明治21年（1888年）12月23日、福山市に生まれます。広島県の福山中学校、これは現在の誠之館高校ですが、

誠之館高校を出て第一高等学校、そして東京帝国大学に進み、若干26歳で助手、同じ年には助教授になっております。早いですね。

順風満帆な人生に見えるのですが、大正9年1月10日には、32歳の時、森戸事件という思想弾圧事件といえますか、筆禍事件といえますか、この事件により東大を休職。結果的に朝憲案乱罪というかたちで刑事裁判が確定し、追われております。その後、大原社会問題研究所で女子労働の研究とか、大阪労働学校及び神戸労働学校等々で労働者教育に従事いたします。

そして、戦後は憲法研究会を経て、昨今、年金で最低保障年金制度が問題になっていますが、それに関わる憲法25条の生存権を日本国憲法に入れます。これは後でもお話をいたしますが、生存権はGHQ憲法の中にはない条項です。この条項を入れたのは、実は、憲法研究会を経て、衆議院の特別小委員会、芦田委員会というのですが、その委員であった森戸が入れたわけです。その意味で、森戸という人物は、日本国憲法の制定にあたって重要な役割をした人物でもあります。

そして衆議院議員、文部大臣になります。その後、広島大学の学長になり、中央教育審議会の会長、文化功労者となり、1974年5月28日に亡くなっております。実はこの間、森戸さんは「百まで働こう会」という会を開いておりました、その会長をされておりましたが、残念ながら5年足りなかったわけです。

森戸を語るときに重要なのは、人との付き合い、中でも影響を与えた人物です。五千円札の新渡戸稲造。実は、ここに森戸がおりますし、ここには吉野（信次）というのがいます。この吉野は、後に商工省の事務次官になります。ある意味で、岸信介の親分にあたる人です。それから、この人は三谷隆正で昭和天皇の侍従です。全て同級生ですが、東大雄弁会でも森戸と新渡戸は関係があります。

実は新渡戸という人は南部藩の出身ということもあり、優秀な人に対して、卒業の時に鉄瓶を送るのです。その鉄瓶は、現在、広島大学文書館にあります。

来ていただければ、文書館長室の少し奥のほうに置いてありますので、お見せすることができます。

先ほど言いました新渡戸との出会いですが、新渡戸の教育は人格教育といわれています。森戸は、新渡戸教育・大学の目標を、「職業的能率ではなく、専門的知識ではなく、人格の涵養」にあると考え、それを体験的に「吾々の精神の一般教育（ゼネラル・カルチュア）であった」としたのであります。

森戸にとって大学とは、人格の涵養を行う場所であり、大学教授とは教育者であったと。そして、森戸にとって新渡戸教育が新制大学——現在、広島大学は新制広島大学になっているわけですが——における一般教育の原型と森戸は述べており、また、それを実践していきました。



また、後藤新平と一緒に、教育というものを、より多くの人たちに知らせていきたいといったことで、通俗雑誌の中で教育を広げていくことも新渡戸はやりました。これは通俗大学というやり方ですが、この考え方を森戸も受け継ぎ、外に開く教育を基本的に考えていったわけです。

この実践例として、例えば大阪労働学校や神戸労働学校という、労働者で、お金がなくて中学校に行けなかった人々に対する教育に従事していったわけです。

これは神戸労働学校の学生募集に関するポスターです。ここに森戸辰男の名前が筆頭で載っております。

これが森戸事件ですね。これはクロボトキン（ピョートル・クロボトキン）という無政府主義者です。民主主義というものは、現在は最も至高のものだと考えられていますが、全ての人類が哲人化すれば、そのような民主主義などは要らないわけです。民主主義というのは、ある意味で次善の策と考えられます。最終的には、人類が、人間一人一人が哲人化していき、そして無政府主義になっていく、これは一つの理想でありま

す。この理想に関して述べたのが無政府主義というもので、その無政府主義研究の第一人者がクロボトキンですが、その研究を森戸辰男はしていました。

しかし、この研究をしたことで、興国同志会の人たちが非常に怒ったと。なぜ怒ったのかといいますと、東京帝国大学というのは官吏養成の大学です。それも戦前ですから、いわゆる天皇制の下における官僚です。その官吏養成の大学にあって無政府主義などというのは、天皇制を否定する学問だと、こんなことをしては問題だということで新聞沙汰になり、結果的に森戸は大学を追われます。

そして朝憲紊乱罪によって、収監されました。

その後、森戸は大阪に行きまして、大原社会問題研究所に入ります。この大原社会問題研究所というのは、大原孫三郎が倉敷紡績等々の紡績業でもうけたのですが、そのもうけたことに関して、自分は成功したが、世の中には貧乏な人間がたくさんいると。なぜ貧困が生まれ、そして解決することができないのか研究してくれということで、森戸の恩師にあたる高野岩三郎に依頼をしてつくったものであります。

高野自体は東大の教授でしたが、国際労働会議に参列する、参列しないということでしたもんだした結果、東大を辞めています。その高野の下に行きます。

この大原社会問題研究所のグループというのは高野が中心ですが、高野自体は体が弱く、実際の中心として運営したのは、森戸でした。しかし、歴史というのは往々にして修正されるもので、実はこの大原社会問題研究所の歴史の中で、森戸の存在はずいぶん薄くなっています。なぜ薄いのかといいますと、大原社会問題研究所にずっと残った鮫島という人物が、森戸のことを嫌ったからであります。

戦後になりますと、日本文化人連盟というものがつくられます。戦前は抑圧的な体制の中でしたが、戦後はマルキストやオールドリベラリストの人たちも、やはり文化によって日本は復興していかなければいけないのだという立場から集まり、その中から新たな憲法を作っていこうという動きがあります。この動きの中心になったのが、森戸や高野、馬場（恒吾）、杉谷（孝次郎）という人たちであり、森戸はこの人たちとともに憲法研究会というものをつくります。

この憲法研究会において重視されたのが、実は天皇制、それから基本的人権・生存権・経済社会的な文化的基本権、憲法制定会議、レビューの必要というよう

な4点でありました。そして第一回会議を経て、憲法改正要綱ができ、憲法草案要綱というかたちになります。これがGHQに提出されて、GHQ憲法、現在の日本国憲法の草案に大きな影響を与えたと言われています。

これが憲法改正要綱であります。この憲法改正要綱は、現在、広島大学文書館に保存され、公開されています。

実は天皇ということではありますと、現在、憲法に関する議論が各党でされていますが、天皇は象徴天皇制として憲法に規定されています。元首ではあるけれども、象徴であり、実質的には国民主権なのだというかたちになっているわけです。

この「象徴天皇制」、「象徴」という言葉を一番初めに使ったのは、この森戸辰男です。もう一つ特徴的なことは後でもお話ししますが、森戸は当時、この芦田小委員会にあたっては社会党の代表として入っているのですが、森戸は護憲という立場でお話をしたのではなく、実は10年後にはこの憲法は改正されなければいけないという議論をとっていました。

森戸は、憲法改正委員会の中で、前文に「窮乏と酷使」というかたちを入れて、翻訳調の前文を、なるべく日本語に近いかたちにしていこうと努力をします。天皇条項や象徴天皇制などの部分、あるいは「個人の権威」を「個人の尊厳」に変えるというようなこと、労働権あるいは教育権について発言をし、修正をしていきます。

中でも憲法第25条の生存権。「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という、この憲法第25条に関して、森戸は、もともとの憲法にはなかった条項ですが、それを入れていきます。そして、最終的に8月24日に憲法改正案は可決され、貴族院を経て、11月3日に日本国憲法は公布されています。森戸は、その意味では日本国憲法の制定に深く関わっていたわけでありました。

それと同時に、この憲法自体が、いわゆる占領期に行われたものであり、国民一般がつくったものではないということも自覚的でありました。ですから森戸は、この日本国憲法の内容はいいのだけれども、10年後には、もう一度国民会議を開き、制定会議を開いて、新たに作り直さなければいけないと。だから、この憲法という条項は、現状の日本、いわゆる敗戦直後で非常に貧乏な状況なので、敗戦の日本を救うような経済的

な条項もたくさん入れていかなければいけないのだという立場を取ったわけです。

ある意味で、戦後の改憲か護憲かというような二分法でいきますと、森戸は護憲派でありながら改憲派でもあったということで、このような二分法が実際には間違いだということでもあるわけです。このようなかたちで、憲法は衆議院で可決され、貴族院に回付されて日本国憲法が成立していったわけです。

さらに森戸は、日本の教育の基本を決めていった教育刷新委員会の委員としても参加しております。その前の昭和21年2月2日には、広島県の福山公会堂において「民主主義と教育」と題する講演をしております。新しい時代には新しい人が必要なのだと、文化的な革命なのだと。

この文化革命というのは、実は森戸が最初に言ったものではありません。森戸が東大を追われて大原社会問題研究所に行き、大原社会問題研究所からドイツ等に留学をしています。その時に、森戸は、当時の日本人として非常に珍しい体験をした。それは何かというと、敗戦という体験です。

ドイツは第一次世界大戦の敗戦国ですから、敗戦国というのがどのような状況になるのか、森戸は見ているわけです。ハイパーインフレで物価が高騰し、多くの人たちは経済的な生活、日々の生活に追われていく。

そのような中で、ドイツ人はどのようなかたちで復興を図ろうとしていったのかというと、これが文化による再興です。経済も駄目、軍事も駄目となると、やはり文化だということになる。森戸は、そのことを見て学び、そして日本に引き直し、日本もまず文化的な再興が重要だと考えたのです。そして文化の前には、文化を培う新しい人たちが必要なのだということで教育に熱心になっていくわけです。具体的には、教育勅語の廃止を、日本国憲法との関連から主張していきます。

この教育刷新委員会の第一特別委員会の中には、実は森戸と芦田均も入っているわけです。こんなことを言う問題ですが、右・左というものもあれですが、左翼の人たちは、憲法教育基本法体制という言葉をよく使いました。つまり、憲法というのは憲法第9条です。憲法第9条と教育基本法というのはセットになっているのだと。だから、日本の平和教育は非常に重要なのだというように、これまで教育をしてきたわけです。しかし、その中心人物であったのが森戸です。森戸は、

教育刷新委員会の前文に大きな影響を与えますし、教育勅語の廃止も主張しました。森戸は、立派な人間をつくる基礎、一般的教育、普通教育の重要性を指摘したということで、教育基本法の前文に大きな影響を与えます。

ちなみに現在、例えば憲法の解釈において、前文と第9条のどちらが重要なのかという議論があります。憲法学者の中でも、左翼的な憲法学者は、第9条が重要なのだと言うわけですが、実際には、この憲法改正委員会の議事録を見ていると、当時の日本社会党は「憲法第9条を前文に入れても構わない」と提案をしています。これは何を意味しているかという、憲法第9条よりも前文のほうが重要だと意味しているわけです。

前文というのは単なる前文ではないのです。森戸は、なぜ前文に関して、日本語として格調が高いものにしようと努力したのかと言いますと、前文というのは日本国憲法の総則に当たる、中心的な、ある意味では憲法の要約文だと考えていたのです。ですから、何よりも前文のほうが重要だということは歴史的にも証明できるのではないかと考えています。

さらに、その意味で、憲法・教育基本法体制というものがあったとするならば、その中心になるのは、両方に関わって立案にあたり、いわゆる前文を作ってきた森戸辰男だというふうにも言えるわけです。森戸であり、芦田でありと言えるわけです。

森戸は、片山内閣において文部大臣になります。

実は宮中を含めて席次というのがあるわけです。当時、今でもそうですが、やはり大臣と言いますと、戦後においては大蔵大臣・財務大臣が一番偉い。予算権を持っていますから、席次一番の外務大臣と財務大臣になります。

森戸は、当時の第一党である日本社会党の政策審議会長、つまり政策を中心となって考えていた中心人物です。ですから、本来ならば、どのポストでも選べたのです。実際に森戸は、まず大蔵大臣をやらないと言われるわけです。しかし、大蔵大臣は僕でなくてもやれるだろうと。では、労働大臣はどうだと。労働大臣も、ほかの人がいると。「僕には希望があるんだ」と言って、わざわざ文部大臣になったわけです。

なぜ文部大臣になったのかと言いますと、先ほどから述べておりますように、新しい日本というのは新しい人をつくることだと、教育なのだという信念があっ

たからです。そのために、伴食大臣と言われていた文部大臣に森戸はなったわけです。

森戸は、片山・芦田両内閣において文部大臣をやるわけですが、新制高等学校の発足、視学官制度の廃止や教育委員会、あるいは教科書検定制など、いろいろなことを手がけます。

一番重要だったのは、実は新制中学です。それまでは小学校までが義務教育だったわけですが、中学校の義務教育が伴ったことにより、予算化が必要でした。当時、GHQは予算をやると言いながら、結果的に予算をくれなかったのです。このために、実は全国で30人もの中学校の校長先生が自殺をしています。そういう時代です。森戸は、このことに非常に苦慮しました。

「六三制の破棄又は変更に伴う影響」、これは秘密文書ですが、このような文書も、現在、広島大学文書館には残されております。



その後、森戸は学長として、広島大学に来るわけです。

森戸は、広島大学初代学長であったわけですが、衆議院を辞職して行きます。この時、本会議で発言を許されて話すわけですね。森戸は「郷土からの就任要望」「日本の復興・再建は青年の向背にかかるという確信」、そして「平和都市広島にふさわしい大学をつくりたい」という、この3点を述べています。

実は衆議院議員を辞める時に、そして与野党を通じた満場の拍手の下に、衆議院を去って広島大学に赴任してまいります。

ただし、当時の『月刊読売』という雑誌には本当のことを書いています。それは何かと言いますと、実は自分は政治家としては不向きなのだ。まず何が不向きかということ、金を集めることができないと。実際に奥さんのご実家は結構な資産家だったのですが、奥さんの服はたった2枚、借金だらけになったわけです。それで、どうも政治家には向いていないということもあり、家族の反対もあったものだから辞めたのだとい

うようなことも書いてあります。

当時の広島大学は、実は開学をしていたのですが、初代学長が決まらないまま1年を過ごしていました。初代学長が決まらないままで、桜井（役）さんという人が代理をしていたわけです。

なぜ代理をしていたのかといいますと、旧文理科大学とか高等師範学校が強いというイメージがありますので、実は高等師範学校の校長であった長田新先生が投票の中では一番でした。しかし、当時の文科省は、戦前、長田新先生は戦争を励賛し、多くの学生を学徒というかたちで戦争に押しやっていたという立場から、初代学長としては難色を示すのです。そのことを、『朝日新聞』にすっぱ抜かせます。そこですったもんだしてしまったために、校長のなり手がいないというところで1年がたったわけです。

もし、森戸が在野にいたならば、すぐ学長になったかもしれませんが、森戸自身、当時は文部大臣ですから選ぶ側にいました。そこで、理学部の藤原（武夫）先生などを中心として森戸を迎えようということになります。

建学の精神は、「自由で平和な一つの大学」。これは、昭和25年11月5日の開学式の講演「変革期の大学」で「一つの世界」「一つの祖国」「一つの大学」ということからまとめられて、「自由で平和な一つの大学」という建学の精神が生まれました。

この広島大学というのは明確な建学な精神を持っている点で、私立大学と同じような意味合いも持っているということです。そして、森戸三原則というのがあります。「中国・四国地方の中心大学」「地域性のある大学」「国際性のある大学」。現在の理念、五原則と言われているものも、この森戸三原則を換骨奪胎して、原田元学長の下で作られたものだと言えます。

実際に森戸さんは、この大学において具体的にどんなことをしていったのかというと、キャンパスの統合です。ただし、このようなことは、やはり元文部大臣ということもあって、スムーズにそれなりの予算を取ってくるから成功していったのですが、昭和28年の大学管理法案が成立しなかったことによって、実は大きな問題が出てきます。

ここには、私と同じ同僚の方もたくさんいらっしゃるのですが、現在、大学というのは高等教育機関です。しかし、教員の昇進にあたって何が重要かといいますと、実は教育の業績なんていうのは、重要ではない。

あくまでも学問業績によって、准教授になり、教授になっていくわけです。

こんなことを言うと問題ですが、例えば教育などというものは、やればやるほど損をする。例えば、授業を負担します。前期10コマやろうと、2コマやろうと給料は同じです。一般社会においては、仕事をやればやるほどお金は増えていくものですが、増えない。つまり教育をどんなにやっても給料が増えることはないです。ですから、どうなるかということ、なるべく教育はしないで研究をして、そして昇進をしていくということを考える。この考え方は、基本的に旧制の大学の考え方です。

森戸は、そうではないのだと。新制大学というのは教育が中心なのだ。つまり教育をして大学というものになっていくのだと考えて、その中心になるのは、あくまでも教授会ではなく、大学を代表する顔である学長なのだという立場を取りました。

そこで、この大学管理法案を非常に強く望んでいたのですが、大学管理法案は未成立に終わり、多くの教員たちの意識が旧制に戻っていったのであります。このことが結果的に、森戸は大学の現場で働いていたわけですが、より中央で大学全体を中心とする教育を改革しなければいけない、せつかくGHQによって定着した民主主義というかたちの教育、民主教育と言われているものを再定着させていかなければいけないということで、中央での活動を強化していく一つのきっかけになっていきます。

広島大学は、森戸のイメージもあって、校章に見られるようなフェニックス、そして校旗は緑色です。当時の広島大学にも、共産党系の先生たちがたくさん入っておりました。大学のカラーを決めようといった時に、一番多かったのが赤です。そうすると、森戸が激怒するわけです。赤というのは、広島を灰燼に帰した、焼土と化させた、いわゆる灼熱の炎の色ではないかと。その色を大学のカラーにすることはおかしいと。そうではなくて、新しい息吹と新しいものを生んでいく緑がふさわしいと。この色は少し濃い色になっておりますが、実際の校旗の色は、もっと浅い緑です。

そして、平和な大学ということで、平和文庫というかたちで世界各国から本を集めています。また緑の復興ということで、いわゆる千田町の敷地内にいろんな木を植えていったわけです。これも世界の大学からの寄付によってやっていきました。



森戸の平和とヒロシマの平和ということと言えますと、森戸の平和というのは「戦争主義と暴力主義を排する現実的平和主義」という立場を取っていました。例えば、核廃絶や絶対平和主義という立場は取りません。例えば、ガンジー（マハトマ・ガンジー）などの考え方に関して、森戸はガンジーの考え方は正しい、しかし残念ながら全ての人間がガンジーになることはできないと。まだ、いわゆる哲人社会にはなっていない。そうすると、多くの人間が共有できる平和ということが重要なのではないかという立場を取りました。

森戸の平和思想とは、最終的には反米を中止とした原爆運動、原水禁や民族主義的な反米に対する抑止、封印をするという方向性でもあったわけです。

森戸自身は、例えば原子力の平和利用に関しては推進する側です。また、森戸自身は被爆者ではないので、被爆者の気持ちがいけないということで、理論物理学研究所の三村剛昂という先生から批判を浴びます。これに対して、森戸は三村剛昂に反論します。

後に京都大学の基礎物理学研究所と合併して一緒になってしまう応用物理学研究所ですが、広島大学の附置研究所として存在した応用物理学研究所は、昭和17年に陸軍のお声掛けりでつくられた組織です。つまり陸軍が、当時の三村剛昂の波動理論に基づいて原爆開発をさせるためにつくった組織です。それが、皮肉にも原爆の洗礼を受けてしまった。そして、三村は被爆者になったのです。

戦前はそのようなかたちで戦争推進派であった三村剛昂に対して、森戸はそうではないわけですから、君子豹変という言葉を使います。「君、戦前との関係から君子豹変ではないか。そのような君が平和主義になると言っただけで、急角度に思想が変わっている。そういうことが信じられるか」と言っただけで、三村剛昂は残念ながら黙らざるを得なくなっていったわけ

です。

このように、急速な急角度における思想の変化や、それに伴う反米とかということに関して漸進的にするために、封印や抑止という立場を取りました。例えば、原爆の子の長田新先生とは違った動きをしたわけでありました。

この1953年12月の「大学教授について」というのは、なかなか面白いです。森戸は、大学教授の大事な資格を「時勢に応じて機敏なポーズをとったり、理論を器用に操作したりする能力ではない。その学問思想が人間性にとけ込んで一貫性と真実性と信頼性を持つことにあるのだ、と思う」ということを述べています。反動的な学説であっても、一貫した人間のほうがふさわしく、戦前は左、戦中は右、戦後は左というように急角度に思想を変えていくような人間は信用できないのだと述べているわけです。

ですから、その上で戦後になってくると、「旧制大学以来の教授にあっては、研究者としての伝統と誇りが強く残っており、新制大学にあっては、在来の研究者としての任務をば、何が大学教授にふさわしからぬもののように、これを軽視し回避せしめる傾向がみうけられ」と、森戸は非常にそのことを批判しているわけです。そして、森戸は13年と11カ月の広島大学の学長を経て、このように去っていきます。

惜しまれて大学を去っていったわけでした。

そして、森戸は第三の教育改革という、大学制度を含めた学制改革をめざします。これは、戦後教育改革の再定着と私は理解しています。例えば、中央での活動を強化していった過程の中で、国立大学協会あるいは中央教育協議会を通じて教育制度の改革、そして大学一般教育研究会を通じた教員教育を行っていきます。

そして結果として、1963年に三八答申（中央教育審議会答申「大学教育の改善について」）、四六答申（中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策について」）が出ます。現在の国立大学法人化の原型が、ここにあります。その意味では、先を読んでいたというふうにも理解できるわけです。

これが、森戸の「教育再改革に関する問題点」という原稿です。正直言いまして、森戸という人は、いろんな講演をするわけですが、全て自分で原稿を書いた人です。

昨今、こんなことを言う問題ですが、麻生（太郎）

という首相は、私の子どもにも非常に悪い影響を与えました。それは漫画を読んで首相になったと、愛読書は漫画であるということがあって、子どもたちが漫画ばかり読むようになりました。そして、誤字脱字も平気だというような悪しきメッセージを与えています。

なぜ、そのような悪しきメッセージを与えることになったのかといいますと、いろいろな声明文、例えば首相が行う所信表明とかも人に任せて作り、自分が筆を入れていないからです。そういう意味では、森戸は全部自分で書いたというところに特徴があります。

同じ首相でも、大平正芳という首相がおりましたが、彼は全ての所信表明に赤字を入れています。基本的に作成過程にも関与しており、多くの場合、彼が赤字で直し、もう一回、作り返させるという行為を経ているわけです。そのように考えたときに、現状における政治の劣化が如実に分かります。その意味で、森戸は全ての文書を自分で考えながら話していたというところに特徴的です。



これは日本育英会の時の森戸です。実は森戸の写真というのは、広島大学長時代の写真にあまりいい写真はございません。みんなむっつりしており、愉快ではなかったのでしょうか。これは辞めた後の育英会の会長時代の写真です。結構にこやかですね。

では、次に梶山季之に入りたいと思います。梶山季之はソウルの出身です。その後、京城中学を経て、広島高等師範学校に入学をします。卒論は、400字原稿用紙でたったの17枚という非常に薄っぺらなものでした。

そして上京し、文芸春秋のライター、トップ屋という職業を経て、その後『黒の試走車』という産業スパイを扱った最初の小説、あるいは『赤いダイヤモンド』という小豆相場に関する本を書き、ベストセラー作家になっていきます。そして、所得番付の1位にもなるのですが、若干45歳で亡くなってしまいうわけです。



梶山のお父さんは、戦前は朝鮮総督府に勤めていましたが、戦後は市役所に勤めます。この家族写真で非常に珍しいのが、女中さんが写っていることです。いわゆる植民地の女中さんが家族同様に写っているという写真です。この次男坊にあたるのが梶山です。

梶山の3級下には作家の五木寛之がいたりするわけですが、朝鮮における経験は、『李朝残影』や『族譜』という小説に結実していきます。

もう一つ、これは後でお話をしますが、森戸との共通性で言いますと、この金井（利博）との付き合いがあります。

金井（1914年～1974年）は、旧制の広島高等学校から九州帝国大学に行き、召集をされます。その前に、実は朝日新聞社に入っていたのですが、召集されて、朝鮮半島で敗戦を迎え、戻ってきて中国新聞社に入社します。もともとは三次の造り酒屋の息子さんです。その後、学芸部長や原爆被災白書運動など、地域、広島における学芸といいますが、地域文化の振興に一番尽力した人物であります。

そして、彼のグループは「金井学校」と呼ばれていました。そのメンバーは、前の前の市長であった平岡敬先生や大牟田稔さんが筆頭株です。大牟田さんは、平岡市政における広島平和文化センターの理事長であります。平岡先生は、広島大学文書館の顧問に就任していただいております。平岡さんは広島大学の前身校の一つである旧制の広島高等学校のご出身ですし、大牟田さんは広島大学の文学部の卒業ということもある

ので、彼らの資料も、この金井さんの資料も、広島大学文書館に全て収めております。

そして、この金井学校の一人に梶山は入っています。ですから、自らが亡くなる前年に金井が亡くなるのですが、悼辞を読んだのも梶山でありました。「やい、金井、ためえ、なぜ死にやがったんだ」というような文章ですが、非常に切々とした悼辞です。

これが、坂田稔と二人で書いた『買っちくんねえ』という小説集です。これに対して、真下（三郎）教授は「卒論よりよし」と電報で打ったと言われています。

原民喜という原爆詩人がいますが、この詩碑を作るのに奔走したのは金井であり、事務局にいたのが梶山です。これが除幕式です。実は、この除幕式に森戸辰男がいるのです。

梶山は、どうしようもなくなってしまい、このままではいけないと、やはり文を書くには広島という場所では駄目だということもあって、東京へ出ます。

東京へ出て喫茶店を開いたりするのですね。「ダベル」という喫茶店で、酒場でもあるのですが、ダベルというのは話すということをもじっています。そこで、例えば『新思潮』のグループなどと付き合い、三浦朱門、竹島茂、有吉佐和子、村上兵衛、曾野綾子というような人たちとの付き合いを経て、文学へ精進していったわけです。

しかし、なかなか芽が出ません。そこで、1958年（昭和33年）1月に、文芸春秋のルポライター養成というかたちでルポライターになります。このルポライターというのは、彼には合ったのでしょうか。頭角を現していきます。特に皇太子妃の美智子さま、いわゆる皇太子の恋というようなスクープをものにしていくわけですね。そして、一躍その名を知られていきます。また、ノンフィクションライターとしては、大宅壮一ノンフィクションクラブに加入し、ノンフィクション作家としての方向性も見いだしていきます。

そして、トップ屋と言われ、1959年に入ると、文芸春秋の中から『週刊文春』という雑誌が創刊されますが、部下5人を集めて養成し、梶山グループをつくり出します。これは梶山軍団とか梶山部隊とも言われるグループです。

5月11日は彼の亡くなった日なので、梶葉忌というのが毎年、東京で開かれるのですが、私は今年も招かれて行きました。その時に、このトップ屋軍団の人たちとお話をしたのですが、梶山というのは、やはり親

分肌だったのだらうなというふうに思っております。

また同時に、現在、雑誌の作り方にあって、梶山は自分が全部調べて書くわけではなく、グループのメンバーが調べてデータ原稿を作り、それをアンカーマンである梶山が集めて、そのデータを元にしてストーリーを組み立てていく、このデータマンとアンカーマンというシステムを日本で最初に導入したのが、実は梶山です。

この梶山グループというのは、多くのトップ記事を書いています。例えば、辻政信という、戦後、独立後に参議院議員になってトップ当選をした元軍人がいました。この辻というのは、例えばノモンハン事件を起こした中心人物でありながら、責任を全て現場の連隊長に押しつけて、連隊長は全部自殺させて自分は生き残り、戦犯指名を逃れるために10年間逃亡を続け、独立とともに政界に打って出て当選した人です。

この辻というのは頭のいい軍人ではありますが、一方で変な癖を持っていたとされます。それはカニバリズムです。人肉を食うと言われていたのです。さらに、非常にダーティーな部分を持った人物だったのですが、梶山はこの辻と最後に会談した人物です。インタビューを取り、梶山が厳しい質問を何回か繰り返しているときに、これはまずいと思ったのでしょうか。その後、辻は失踪して、行方知れずになってしまったのです。

このように梶山グループは、下山事件とか、いろいろな疑獄事件など、真相に近づいており最高レベルの調査能力を持っていた部隊でありました。この間には小説も書き、ノンフィクション作家として、冒険ものとして、ここの部分は自分の生活に当てて、トップ屋の仕事は全て部下の給料と新しい取材に使っていたのです。

しかし、『週刊文春』の編集長の家に右翼が殴り込みをかけて、奥さんと家政婦さんが亡くなるという嶋中事件があり、文芸春秋は方向転換をして、どちらかというところ、このトップ屋記事を抑えていきます。このため、梶山は3年半続いたトップ屋をやめて、梶山グループを解散、彼は小説家に再転身していったわけです。



当時の梶山です。これは缶ピースですね。梶山の写真のほとんどがたばこを吸っています。

梶山は、たばこをずっと吸っていました。しかし、本当は吸ってはいけない人だったのです。なぜかと言うと、結核だったからです。実は、彼は自分自身のライフスタイルとして、中国新聞社に入り、そして小説を書くということを考えていたのですが、肺の中に穴が開いていたものですから、中国新聞社には行けなかった。そこで小説家一本というかたちになっていきました。

ベストセラー作家として、本当に沢山書いています。特に産業スパイ。昨今、中国の産業スパイの話が新聞紙上にはたくさん出ておりますが、産業スパイというものを最初に取り上げたのは、この梶山だったりします。そして、ベストセラーとしての歩みが始まっています。

これは、『黒の試走車』の出版記念会ですね。無名だったにもかかわらず、非常に多くの人が集まっていた。まだ若いですね。しかし実際には、この当時のノンフィクションライターというのは、あまり高い地位ではなかったというか、つらいこともありました。

『夢の超特急』というのは、『黒の試走車』に続く非常にリアリティーのある小説でした。どういうものかと言うと、新幹線を引くにあたって、土地の売買をめぐる、黒い闇、黒い霧がたくさんあり、政治家が先行取得をして高く売るなんていうことがたくさんあったわけですが、こういうものを調査をして暴いていった。しかし、そのままでは記事にできないということ

もあり、小説仕立てで、それを告発したのですね。

検察からは、なぜこんなに具体的な数字が分かったのだと言われたりするのですが、しかし多くの人たちは、これは小説だ、架空な話だとしか理解できない。そこで、彼は挫折を覚えるわけです。

そこで、彼はエンターテインメントという点で、少しエッチなところがある小説を中心にしたり、あるいはマーケティングをして、読み手の人たちがどんなものを望んでいるのかを調査しました。当時、女性たちにマーケティングをしますと、できれば復讐劇がいいとか、近親憎悪みたいなものがいいとかいうことで、そのマーケティングに合ったような小説を書いていきます。ある意味で、この『夢の超特急』が受けなかったことは、非常に痛恨の深い小説なのだと後に答えています。

作家という仕事ですが、大衆作家として取り組んでいきます。さらに、どちらかというアウトサイダーのようなイメージを付けられていきますので、そのイメージに沿ったかたちで彼は努力をしています。

一方で、彼は本来は非常に善良で、なおかつ愛妻家でもありました。しかし、小説家としての彼は、どちらかという奔放で女性好きでというようなイメージがつくられています。そのギャップの中で、彼は非常に善良だったために、今まで自分が世話になった人たちから頼まれると、全て引き受けた。例えば、2晩3日で原稿用紙270枚の小説を書いたりするわけです。

そのように、どんなレッテルを貼られても、甘んじて受けたというところがあります。そして、ある意味で高度経済成長期に、マスコミが発達する時代に適合した作家の一人であったのです。

彼を見てもみますと、彼の仕事は、ほぼ同時並行で入っていたというのが分かります。またヘリコプターで原稿をつり上げたなんていうこともあるわけです。彼は、ペンを変な持ち方していますが、書痲といって手が動かなくなった結果です。そこで、持ち方を考案し、1回転するだけで20字書けるということで原稿を量産していきます。

そして、昭和44年には長者番付で1位になります。シバレン（柴田錬三郎）とか、山岡壮八だとか、シバリョウ（司馬遼太郎）とか、松本清張などを押さえて1位になるわけです。

こんなことを言うと失礼ですが、昨今、電車を見ていると、私は今51歳ですが、電車の中で私ぐらいの

歳の人たちが携帯電話でゲームをしているわけです。あれを見ると、私は非常にさげな気がいたします。

私自身は中学校時代から電車通学をしていたのですが、昔は多くの大人たちが活字を読んでいた。文庫本とか、新聞を折りたんで読むとか、みんなしていたような気がします。その時代のほうが勉強していたのではないかなと。ちなみに現在、40代、50代の日本人というのは、世界で最も勉強をしていない国民です。大きな問題だと思っております。

その意味で、梶山の本は、多くの読者に読まれました。梶山は、年間に1万枚を超える原稿用紙を書いたりもするわけです。さらに、その間、テレビとかにも出演しています。

一方で、『さらば京城』の書き出しが4種類もあります。奥さんが、これを批評するのです。後にこれは積乱雲という未完の小説の一部になっていきます。

一方で、実は梶山というのは、先ほど言った金井による原爆被災白書運動の資金提供者でした。彼は、当時のお金で2,000万円、現在では2億ぐらいのお金の資金援助をしていました。しかし、当時は被爆者の聖人化というのが進んでいて、彼が書いた『ケロイド心中』、これはケロイドを負った兄と妹が近親相姦に陥り、そして心中を遂げるとい話ですが、これに対して、被爆者団体からは被爆者の心を踏みにじると非難をされます。このようなことを経て、だんだんと遠のく部分もあったわけです。

そして、彼はしだいに疲れていきます。トップ屋として、あるいはベストセラー作家として働きすぎたのです。そして、もともとの仕事に戻っていく、回帰していきます。そこで、自分の生まれ故郷である韓国を訪れて、取材に励んだりしました。

彼の小説は、漫画にも、映画にもよくなりました。そして『噂』という雑誌の発行者にもなったりもしました。この『噂』というのは、小説にならないのですが、小説になる前のネタのようなかたちのものを作家たちに書いてもらうというもので、今読んでも非常に面白いですし、書いている人たちはきら星のようですが、完全な赤字雑誌になってつぶれてしまうわけです。

これが愛用のかばんです。実は、これは亡くなった時の物がそのまま残っております。これも文書館にあるわけですが、原稿用紙が入るような特殊なかばんです。例えば、ピースとか、ウイスキー入れとか、いろいろなものが入っていますが、中には男性が使うコン

ドームなどもたくさん入ってしまって、それを見た奥さんは「ああ、こんなものが入っていたのね」と、それで終わりでした。「これは取材の材料だから」と平然とされていて、「まあ」と言って並べられていました。そのようなものも実際には入っていたわけです。

さて、まとめていきますけれども「一貫と回帰」ということでお話をしたいと思います。

森戸辰男は、無政府主義を理想としながらも漸進的な改革を目指した。教育者としては、非常に一貫とした人生を送られた人です。一方、梶山は、高度経済成長に伴走した作家と言われるわけですが、最終的には「朝鮮」「移民」「原爆」というような『積乱雲』という小説に凝縮するはずなのに帰っていきます。

両者の類似点ですが、いわゆる批判をするという点で言いますと、例えば、戦前に「大学の顛落」論争がありました。森戸は、大学は学問の自由と大学の自主を失っていった、このことは非常に問題なのだと、国家による教学刷新なんてとんでもないのだと論陣を張ります。また、新渡戸も満州事変に反対して、結果的に日本に帰ることができずにカナダで客死しており、その意志を継いだかたちでも彼は論陣を張ります。一方、梶山もトップ屋として、いわゆる戦前・戦中・戦後でいえば、戦中と戦後の連続性のなかで起きた闇みtainところなどに光を当てています。こういう点で非常に類似性があるわけです。

しかし、森戸は戦後というものが高く評価して、新しい時代なのだということで再定着を考えていく。それに対して梶山は、戦後に焦点を当てて、戦後の中で彼はトップ屋として成功していくわけですが、戦中・戦後の連続性の中で、闇あるいは悪というものを非常に小説の中に取り上げていきます。

森戸にとっての新渡戸や、梶山にとっての金井も二者の類似点です。



二人の評価ですが、先ほど言ったように、虚像と実像があります。また、その後の評価というのがあります。実は、その後の評価としては、森戸の評価は高くありません。NHKスペシャルの『日本国憲法誕生』で、森戸が取り上げられました。その反響もあって、森戸の評価というのは実は高まりつつあるのですが、虚像と実像といいますと、非常に戦後つくられたイメージ。

つまり、戦前は左翼だったのに戦後は右翼になったというかたちで、転向者なのだとか左翼の人たちから非難を浴びて評価が下がっていたのですが、実像は一貫している、変わっていたのは批判者のほうなのだということがあったりするわけです。

梶山の場合も、実像は非常にまじめな人ですが、何かアウトサイダーというようなイメージ。そのギャップという点で言いますと、梶山のほうが大きかったのだろうと考えているところです。

この二人。森戸は、今も広島大学の中には根付いているはず。教育の面でも、いろいろな面で根付いているはず。また梶山は、作品というかたちが現在も残っています。『小説GHQ』なんて今読んで面白いです。その意味で、先取りした内容を非常に持っていたということ。です。

では、今お二人が生きていたらどう考えるだろうかということ。今は停滞感がある時代ですね。実に停滞感がある。漠然とした不安や、敵の設定をするというようなやり方もあります。

もし森戸が生きていたら、例えば、今の野田首相などはほこぼこだったかもしれません。ある意味で、政策的な一貫性がないわけですから、そういう意味で、彼などは非常に野田さんのことを批判したのではないかなと思っております。

こんなことを言うのは、何も私が今度給料を減らされるから言っているわけではありません。いわゆる変節という点で、主張を最後まで一貫していくということを森戸は非常に重要視したわけです。

また森戸は、昨今の大学の教員に対しても非常に批判的だったのではないのでしょうか。例えば、今回の3・11で大問題だったのは、実は菅直人政権における官邸が機能しなかったことが原因ですね。この機能不全がなぜ起きたのかということ、実は菅は官僚を信頼していません。このために、座学しか知らない自分の仲間の教員たちを、大量に側近として集めたのです。

そうすると、座学しか知らない、現場を知らないも

のですから、この意見はずいぶん対立してしまいました。そのために情報が錯綜してしまい、どれを取っていいのか自分でも分からなくなりました。そして、情報が上に上がって官邸が動揺しているわけですから、事実上、意思決定ができない状況となり、大問題になっていくわけです。梶山がいたならば、このことを非常に厳しくついたのではないのでしょうか。

今の時代、これはいい例かどうかわかりませんが、例えば、世の中が停滞していくと何が起ころかということ、実は自分で考えなくなっています。

基本的に、この日本社会における戦後の活動というのは、現場に生き、現場で働いている人たちは能力があって、常にQAサークルなどを通じて努力をして、改良してきた結果です。そして事実上、その人たちがトップに立つことによって、その苦勞を知っていることで、トップが現場と連携をとったかたちで意思決定ができ、日本の会社というのは一丸となって伸びてきたのだろうと僕は思っています。

例えば、私の父も、兄もおじも全て会社員でしたから、当然そういう姿を見ているので、理解できます。また、私も文書館長ですから、現場を経て文書館長になっている立場からしますと、そのことは理解をしています。そのような現場中心主義がありますが、だんだんと訳の分からない人がトップに立つ。そうするとどうなるかということ、現場の意見を吸い上げることができない。だから問題になってくる。

変な例になるのかもしれませんが、この間、私の息子は西条小学校に行っているのですが、修学旅行に行くと。そうすると、朝、電話がかかってきて、「小池彬君の靴に黒い1本線が入っている。これでは修学旅行に行けません」と言われるわけですね。1本ですよ、本当に1本。

一義的には、うちの息子が悪い。前日に、きちんと白い靴でないといけないと言われていたのだから。いわゆる修学旅行のしおりには、それは書いていませんでしたが…。

それで、朝、女房は「そんなもの、いいじゃないですか。行かせてください」と言ったのですが、電話を切るわけです。やばいということになりまして、白い靴を持って、僕が車に乗って行きました。小学校に行くと、もう子どもたちは下に降りているものですから、横の側道を何十キロという、はっきり言って違法な速度で修学旅行のバスの前に付けて、そして降りていっ

て靴を変えました。

その時に、横を通っていた校長が何を言うかという
と、「小池君、完了ね。出発」と言ったわけです。この瞬間、僕はモンスターペアレントに変わって、「二度とこんなことがあるんだったら、何でもやるぞ」というふうに言ってしまいました。

問題なのは、その後、迎えに行った時に担任が言ったことです。「集合写真をみんなで撮る写真の時に、小池君だけ黒い線が入っているとかわいそうだったから」と言うのですね。後付けです。しかし、そんなことは意味がないわけですね。なぜかという、集合写真で2列目に立っていれば足元は見えなくなるわけですから。履けるかどうか分からない兄ちゃんのお古の白い靴と、場合によっては白のテープを貼ろうと思って、白いテープまで持っていった僕の立場からすると、そんなのは言い訳ですよ。

さらに、私が非常に怒ったのは、校長先生がうちの息子に「こんなことを外で言うてはいけません」と言うわけですね。これには腹が立ちました。

そのようなことは何を意味しているかという、事実上、現場の人は僕に対して悪いと思っているわけです。こんなことはどうでもいいではないかと現場サイドにはあるわけですが、いわゆる現場サイドの意見が上に上がらないと、上の人間は、いわゆる合理的な発想よりも理想論で物事を発想し、それを下に押しつけようとする。

その結果、何が起きるか。現場サイドは、上がこう言っているのだから仕方がないとあきらめになり、いわゆる現場の知恵が上に上がらないので、現場がだんだん濃んでいく。そんな時に何が行われるかという、世の中というのは停滞し、自由から逃走して行くわけです。これは、エーリヒ・フロム (Erich Seligman Fromm) の『自由からの逃走』と、ほぼ同じような動きをしました。ある意味で、そういう時代の状況ですよ。

例えば、野田政権というのは何も決められない。自民党も民主党も「何だこいつら」というような状況になっている。このような濃んだ雰囲気がある意味で橋下 (徹) という人に対する期待感に変わっていく。しかし、橋下という人が、それに耐えられる人間かどうかは、未知数ですよ。そういう検証もできない状況の中で、多くの人間が自ら考えることを否定し、ざっと支持に回っている。これが全体主義というものです。

そのような状況の中で、もし梶山が生きていたらどう見るかという、僕はこのように考えています。梶山ならば、こんなことを言う問題ですが、清潔な仮面をかぶった小悪党。これは、僕はある意味で前の首相を想定しているのですが、梶山は、この仮面などは引っ張りながしてしまおうと思います。

また、彼は悪党を書くのが大好きだったのです。ですから、悪党という点で言いますと、今、政界の最大のヒールという小沢 (一郎) です。小沢などは、もしかしたら梶山は非常に支持したのではないかなと思います。

先週、梶山の姪の方とお会いしました。彼女も広島工業会のご出身で市役所にお勤めですが、彼女とお話をした時に、私も、もしおじが生きていたらそう言うと思うと言っておられたので、確信を持って小沢支持だったのではないかなと思うわけです。そのような意味で、今もこの二人は生きてるように思えます。

最後に、この森戸も梶山も、特殊文庫として全ての資料が広島大学文書館に入っています。現在、森戸に関しては整理が終わり、約3万7,000点ありますけれども公開をしております。梶山のものは、まだ逐次、奥さまのほうから資料を送ってこられるので整理中です。できるかぎり今年度、少し来年度に入るとは思いますが、全面公開をしたいというふうに思っております。ぜひ、広島大学に来られるときには、工学部からは少し離れておりますが、文書館のほうに足を運んで見ていただければと思っております。



今日は、ご清聴ありがとうございました。

○司会 小池先生、どうもありがとうございました。

それでは、多少時間がございますので、どなたか質問がございましたら挙手をお願いします。

○会場1 昭和48年卒の三枝と申します。今日はとても興味深いお話をありがとうございました。

森戸さんは、なぜご自身で1955年に改憲の発議、もしくはその問題定義、もしくはそういったアクションをしなかったのですか。

○小池 実は当時、森戸は広大の学長ですので、政治干与ということで影響があるので、改憲などの発議ができるという状況にはありませんでした。

ただし、岸内閣の時に、憲法の改正を目指して憲法調査会をつくるのですが、実はこの会長に議されていたのは森戸です。ですから、森戸がその時に就任をしていれば、そういう発言をしたかもしれません。しかし、政治的な中立の立場にあるべき大学の学長としては、どちらかという国論が割れている中で発言はできなかった。

ただ森戸は、国論を二つに割ったということでいえば、サンフランシスコ講和条約に全面講和、片面講話という時に、南原（繁）は全面講和ですが、森戸は片面講話と、いわゆる多数講話の意見も言ったりはします。

しかし、基本的には改憲というようなことで、この当時は、もう自民党と社会党という対立構造になっていますから、その中では森戸は言えなかったのではないかと考えるところです。もし憲法調査会の会長になっていたら、改正というふうには言っていたのではないかなと思いますけれども。

○三枝 私もNHKのテレビを見まして、当時、日本国憲法を起草した人のお話ということで、10年後には、これは改定されるものだと思っていたとはっきり言っているのですね。それと、今、小池先生がおっしゃったのはまったく符合しているのもう少し僕ら自身が、日本国憲法は何がよくて、何が時代とそぐわなくなっていったのかということを考えるタイミングかなとは感じさせていただきました。

ありがとうございました。

○小池 正直言いますと、いまだにまだ戦後は続いているのです。つまり森戸は、実は日本が主権を戻し、独立を果たした時に戦後は終わると考えていました。しかし、例えば外交においても、内政においても、今も戦後は続いています。

この多くは誰の責任かという、僕は正直言いました、国論を二つに割って全面講和、片面講話と、日本の政治において、そのような不毛な議論をしてしまったという意味で、学者やマスコミの責任というのは非常に大きいと思っています。また、この対立構造を政治的に利用してきた政治家なども悪いなと思っております、みんなが悪いとは思いますが、それらをもう一度はがして行って、戦後を本当の意味で終わらせなければいけない時期に来たということ。

例えば、御厨さんなどは、それを戦後ではなくて災後、現在の3・11以降の震災後ということではありますが、これは少しだめだなと思っております。なぜかと言いますと、これから直下型地震で震災はたくさん起きる可能性がありますので、どこからが災後になるか分からない可能性もあるわけですね。ですから、これはあまり意味がないという思いがしますが、そうではなくて、憲法の問題を含めて、今、戦後を終わらせるいいチャンスかなというようには考えてはいません。

○司会 ありがとうございます。ほかにもございますか。あと一人ぐらいいけるとは思いますが。ありませんか。

それでは、二度手間になりますが、私が小池先生のお話を簡単にまとめさせていただきます。実は、私も大学に通った最初のころは、まだ旧キャンパスに1年、2年通うことがあって、森戸道路という名前が付いていますので、名前は存じ上げていました。そして現在、私は大学で教員をやっているのですが、文書館があって、森戸先生の業績が集められていることは知らなかったのも、近日中に機会があれば行こうと思っています。

いずれにせよ、非常にスケールの大きい気骨のある方が、この広島大学の歴史の中に何人かいらして、その中でも非常にコントラストのある二人の方を人選していただきました。そのベースには、やはり信念を持って、それを貫いて闘って生きていかれたという、非常に素晴らしい話だったと思います。

あらためまして、小池先生に拍手をもって感謝の意を伝えたいと思います。どうもありがとうございます。

小池 聖一教授のプロフィール

- ・昭和35年（1960年）12月25日、大阪府出身。
中央大学、中央大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（史学）。
- ・平成2年（1990年）4月、外務省入省。
外交史料館に移行文書編纂担当官として勤務。
- ・平成7年4月に広島大学総合科学部助教授（現代政治論）。
- ・平成16年4月より広島大学文書館長
広島大学文書館設立準備室長をへて、現在まで。
注：広島大学文書館は、平成23年4月より、内閣総理大臣指定機関となる（政令指定機関）。
- ・平成20年9月、広島大学国際協力研究科教授（協力外交論）。
専門は、日本近現代史、日本政治・外交史、近代日本文学。
- ・著書としては、
『満州事変と対中国政策』（吉川弘文館、平成15年）、『近代日本文学研究序説』（現代史料出版、平成20年）がある。自宅は、東広島市西条本町。
最近のものとしては、「オピニオン「検証する政治文化」培おう」『中国新聞』平成24年5月9日。

